

令和 2 年 5 月 29 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B) (特設分野研究)

研究期間：2016～2019

課題番号：16KT0010

研究課題名(和文) 認知症談話における多様性と患者のQOL向上に向けた統合コミュニケーション研究

研究課題名(英文) Integrated Study on Dementia communication and its diversity for QOL of patients

研究代表者

網野 薫菊 (AMINO, Kaoru)

九州大学・言語文化研究院・共同研究者

研究者番号：80757906

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では認知症談話における複雑性喪失に関して、1)複文の種類、2)従属節中の文節数について患者と他のグループ間のクロス分析を行った。その結果、患者においてa)逆接や原因理由接に比べ、反実仮想や付帯状況といった複文が少ないこと、b)一従属節中の文節数が少ないことが観察された。また質的分析においては、1)社会の患者に対するレイベリング、2)介護者の代弁性について患者発話の意図や真偽を創造する現象、3)患者の心理状況や感覚・思考を代弁する「心理動詞」による代理性、また4)医者発話において客観性を担保するストラテジーとして詳細化要求、第三者の意見参照、検査結果の参照等が観察されることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1)本研究ではアンケート用紙による調査等でなく、2016年の時点でまだ国内において確立されていなかった発話データによる実証的・記述的な研究を目指した。2)本研究では患者発話の特性について、日本語教育学や言語学知見を応用した量的研究を行った。また3)認知症患者各人の意思や意図が、いかに周囲の人間による会話や語りに反映されるのかについて質的に分析し、ステレオタイプによるコミュニケーションを避ける指針となる可能性を示した。4)さらに介護現場と他の医学・情報学・社会学分野と国際的連携を取ることで、多角的総括的な応用を目指した。

研究成果の概要(英文)： This study conducts the cross-examination on 1) Type of complex sentence, 2) Fluency of Japanese syllables per a subordinate clause, in utterances by patients and the other controlled group. Consequently it is clarified that the complex sentences, which are introduced in elementary level of language pedagogy, such as contrastive or cause and effect, are found in patient's utterance more frequently, rather than higher-level sentences, such as counterfactual or attendant circumstances.

In qualitative study, Institutional characteristics, such as 1) Labeling or Stigmatizing towards patients, 2) Constructed discourses of patient's original utterance, 3) "Psychological Verbs", which represent patient's emotional and sensory states, and consideration, 4) Physician's strategy to ensure the objectivity in Care-giver's narrative, such as a) Requesting detailed information, b) Reference to the 3rd observer or result of physical examination, are found.

研究分野：談話分析 社会言語学 日本語学 現象学

キーワード：制度的会話 文の複雑性 複文と従属節 間主観性 心理動詞 発話態度 客観性の担保 スティグマ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究当初において 65 歳以上の年齢が人口の四分の一に近づきつつあり、高齢化に伴う認知症患者に対する研究も増加の傾向にあると同時に、介護の「集団」から「個」の時代を迎えて、社会における従来の一元化された「高齢者像」を超えた多様性・個別性へ目を向ける必要が高まりつつあった。

当時における高齢認知症患者に対する介護コミュニケーションにおける傾向としては、老人に対する特有な患者側の「問題」行動に焦点を当てた研究 (Williams et.al,2009) や、認知症高齢者との患者のコミュニケーション上の「失敗」を取り上げたもの (Magain,2002) などトラブルを前提化・焦点化した研究が多く、患者側の視点に立つものは少なかった。

また海外においては発話データを元とした談話研究が多くあったが、日本国内においてはコンプライアンス等の問題のためか、アンケート用紙による調査が中心であり、患者本人以外のナラティブや記述をデータとするために伝達態度が混入する可能性が高いものであった。

また海外においては、文法や語彙の複雑性を調査し認知症談話の特質を明らかにしようとする言語学と介護分野との学際研究は多かったが、日本語における文法的複雑性を日本において認知症患者の置かれた状況に即して分析したものはなかった。

さらに海外の研究においても、言語複雑性以外の要因、つまり間主観性や解釈、代弁性をスタンス・テーキング理論や現象学、または心理動詞に付随するモダリティという視点から研究するものもなかった。また「スティグマ」理論 (Goffman,1963) を認知症談話におけるステレオタイプの分析に用いたものはなかった。

また研究の成果に関しても、海外においてはカウンセリングや診療教育に役立てようとする試みはあったが、日本では介護分野と言語学分野は別々に活動することが多かった。

2. 研究の目的

本研究は談話研究の実証データに基づいて、認知症患者における言語複雑性の調査、および認知症患者の立場からのコミュニケーション様相を考察することを通して、患者への配慮の改善および生活の質(QOL)の向上に貢献しようとするものである。具体的には第一段階として談話の複雑性、談話の結束性といった言語ローカル要因が、患者のどのような変化をたどるののかに関して時系列的な記述的・実証的な分析を行う。以上のような言語ローカル要因を認知症患者のアイデンティティや視点・スタンスの概念を用いて質的に検証し直すことで、第一段階で得た言語様相結果の背景について考察する。また以上の言語分析の最終段階においては、社会における「認知症患者像」に関するステレオタイプと実像を検証するために、スティグマ (Goffman,1963)・エピステミック・スタンス (Oches,2002) といった概念を取り入れた社会言語学的分析を行う。

このように本研究は統語的複雑性といった言語ローカル要因や会話参加者の背景やスタンスといった言語グローバル要因の分析、および言語と非言語を統合した談話研究を通して言語研究と介護分野との学際的統合を目指す。また認知症患者への一元的なもの見方やパターンリズムを検証し、患者の多様性や自己決定などを検証することで、患者の QOL (生活の質) 向上に貢献しようとするものである。また認知症患者介護の概念が「集団」から「個」へと移る時代の転換期に備え、個人の背景や多様性を重視した言語コミュニケーションに備えたセミナーや研究会開催も研究活動の一環として行っていく。

3. 研究の方法

1) 認知症談話コーパスに基づいた実証的研究

本研究では実証的研究に先んじて体系的なコーパス構築に基づいた実証的・記述的研究を行うことで、前提化を避け患者の言語要素のうち「どの側面が、どのように」他のコントロールグループと違うのかについて実証的言語研究を行う。またデータの収集法や構築について“Verilogue Inc.”のコーパスシステムに協力を求め、当社の求めるコンプライアンスを遵守して日本の土壌にローカライズした言語研究を目指した。

2) 言語学の知見を活かした認知症進行段階別における言語様相分析

言語ローカル要因については、語彙の複雑性および節中の語彙数による複雑性 (Hamilton,2008)、話題など「発話の複雑性 (Heidi,2002)」に関わる言語要因と認知症患者と他コントロールグループと比較を行い、認知症談話の特性を分析した。

3) 視点・アイデンティティ概念を取り入れた質的談話分析

また次の段階では、認知症患者個人の背景を考慮したグローバル要因の分析として、認知症患者各人に対するステレオタイプや介護者の味方がどのように会話や語りに反映されるのかについて、視点に関するフレーム概念 (Tannen,2006) を 2) の言語ローカル要因と共に質的に分析することで、固定化された「認知症患者像」について、談話分析の立場から検証を行った。

4) 認知症患者とのコミュニケーションにおけるスティグマ再生産

また言語様相を社会学的視点から考察するものとして、エピステミック・スタンスや情的スタンス (Oches,2002) といった談話理論を使用しながら、患者個人による認知状況の多様性がどのように取り扱われているのかを観察し、認知症患者の発話意図についてのパターンについて認

知症患者に対するスティグマ(Goffman, 1963)理論を背景とした分析を行った。またそれを通し、認知症患者の在り方に対する一元化を避け、患者の多様性・個性や自己決定権重視に向けての基礎的研究を行った。以上のような研究を通し、国内においてまだ分野として確立されていない、実証的な談話研究と介護分野との学際分野へのモデル提示を目指した。

5)言語分析結果の応用：社会への貢献

さらに実証的研究結果を現場へ反映するための分野連携を通じ、現状に即した分析応用を目指すと共に、言語学から看護学への提言、さらには看護学から言語学への提言等の意見交換を行った。また認知症言語コミュニケーションについて、社会へ向けたセミナー活動を行い、研究の成果を発信しつつ、医学や情報学分野との連携を行った。以上のような統合的介護談話分析を通して、認知症患者の個性・多様性・自己決定権に向けての議論へとつなげようとした。

4. 研究成果

本研究においては実際の認知症談話データを基として、理論・臨床現場におけるコミュニケーション実践をバックアップするために、次の段階では認知症患者と介護者の会話を一種の制度的会話としてのパターン解明を目指した。また現場のノウハウや介護理論に対する言語学的なフィードバックを与えると同時に、現場からのフィードバックも受ける双方向型の談話分析研究を目指した。分析の焦点とする言語コミュニケーション様相においては次のように言語学的な分析単位の小さいもの(ローカル要素)から大きいもの(グローバル要素)まで次のA-Dに示す分析を行う計画とした。

- A, 複文の種類および修飾節中有効語彙数を通した発話の複雑性の解明
- B, 話題維持や話題転換における発話間の結束性の維持
- C, 話題維持や話題転換における発話間の結束性の維持*1
- D, Wachsler Memory Scale(WMS, Wechsler; 1945)を利用した逐語的記憶と全体把握記憶区分

データの収集法や構築について Verilogue Inc.のコーパスシステムを参照に、日本の土壌にローカライズしたデータ収集を行った。また本研究におけるデータ取得のために、代表研究者は北九州市内のデイケアサービス施設において 8 月-11 月の3か月間、実際の業務に携わりながら、フィールドワークを行った。利用者の7割が軽度以上の認知症であり、中には重症と思われるが身体的な介助程度が低いために利用を続けているものがあつた。

その現場にて、利用者同士の会話、また利用者や職場介護者の会話の観察を通して、コンフリクトの種類、コンフリクト発生時の対処、認知症状が発展しても残るものと残らないもの、また介護者バックステージにおける主観性と間主観性の構築とその是非、また介護者が利用者とのコミュニケーションを行う際のフレームを近づける方法などについて参与観察を行った。実際には本現場においては、倫理上の問題や職場の規律等により、入居者の発話データを録音するには至らなかった。

そのため、参与観察と同時並行して研究代表者は米国のデータ会社 Verilogue Inc.にコンタクトを取り、軽度認知症のデータ17名分、計1時間40分強のデータを取得した。それを小規模コーパスとして、分析を行った。データはすでにスクリプト化されており音声データと照らし合わせての応用が可能なコーパスの形となつていた。

以上の発話データを対象とした分析の結果、以下の研究成果があつた。

1)量的分析結果

Aの発話中の複雑性喪失過程においてはレベル別の分析というものは叶わなかつたが、医者や介護者、そして患者の発話のある意味健全者/患者という対立項にて分けることで患者発話の特性を見出そうとした。その結果、複雑性の喪失に関して次の2点が明らかになつた。

A, 複文の使用種類について

発話中の複文(接続節)において、その使用実体について Verilogue Inc.から譲渡された診察室におけるPT(患者),CG(介護者),DR(医者)の三者別に抽出すると、以下の表1における種類および頻出度が観察された。

複文の種類	PT (355T)	CG (363T)	DR (722T)	複文の種類	PT (355T)	CG (363T)	DR (722T)
継続・順接条件等(～て)	21	20	92	個別的事態(～たら)	5	8	49
原因・理由節(～から・ので)	17	15	65	反事実条件(～のに)	0	2	7
逆接節(～けど、～け)	15	13	77	逆接条件節	7	4	9

れど、が)				(~ても)			
時間・場所節(~する時に・するところに)	4	6	6	個別条件(~なら)	0	0	3
一般的事実(~と)	8	4	30	並列(~し・ ~たり・ ~とか)	0	4	43
条件節(~ば) 一般的因果	2	0	14	付帯状況・様態節(~ながら)	0	0	1

表1：患者・介護者・医者による複文節の種類と使用頻度

*PT - 患者, CG - 介護者, DR - 医者

つまり第二言語習得では容易とされる 入門~初級に属する項目(逆接節、原因理由節、時間節、一般的事実) は比較的 PT にも多く見られるが、付帯状況や並列、反事実条件、一般的因果に関する条件節など学習が進んで導入されるものは PT の使用があまり見られないことが分かる。しかし逆接条件節「ても」など初級後半と思われる複文に PT の使用が多いこと、また PT における複文出現数(ターン数も) が少ないことから、結論付けるにはさらに多くのデータが必要となるだろう。

B, 認知症談話における複文中の複雑性

また複文中の複雑性については、文節が多いほど複雑性が高いとの仮説により従属節における文節数を基準とした。その結果、次の表に示すとおりとなった。

	1 (節)	2	3	4	5	6	7 以上
PT	11(回)	26	23	10	9	2	2
CG	6	25	23	18	14	4	1
DR	27	86	97	88	50	31	22

表2：複文節中の文節数(患者・介護者・医者による各節数あたりの頻出度)

全体ターン数から見ても文節の総数はもちろん DR によるものが多いが、グラフにおける出現数の傾向を見ると、DR は 1 従属節あたり 3・4 文節を含むものが多い(山のピーク) が、PT は 1 従属節あたり 2 語彙を含むものがピークであることが伺える。そのため、DR のほうが PT より 1 従属節内の文節数が全体として多いことは伺えるだろう。

ただし、認知症患者であるはずの CG がほぼ同傾向(4 - 6 節は若干 CG の方が多いか) を見せるために、これが患者特有の言語様相であると言い切ることはできない。また 3 節に挙げたように、説明や質問等の長い発話は制度的会話の特徴として医者に多いために、この文節数の多さは当然とも言える。

2) 質的分析結果

言語学分野における " Intersubjectivity " はという個々の主観を摺合せ、合意形成を行っていく過程であるが、この合意形成や共話は実は本当の客観性や真実に限りなく似てはいても、実際の「真実」とは限らない。この言語学における " Intersubjectivity "、つまり間主観性は " Stance-triangle (Du Bois, 2007) " 概念を元に次の 3 点について分析を行った。

A：小説で取り扱われる間主観性の構築に関して

B：また実際のデータにおける主観性や間主観性(決めつけ) について

C：データ中における構築された会話(Constructed-Speech (Tannen, 2008)) と引用節

まず A については、芥川龍之介の『老年』を対象として間主観性の構築を観察したところ、Oches(2002)における自閉症児について「間違いの客観性」を構築する例が述べられたが、同様の構造が本作品においても見られる。つまり評価・判断者・他参加者としての患者を取り巻く人間が、間違った発話意図の構築(あるいは推測)を行っているが、これは果たして本人の発話意図と合致したものでない場合がある。どちらにせよ患者本人以外の参加者は発話者の発話意図とは別に「事実でない」発話意図を再構成していた。また患者本人にとっては真実(Poetic Truth of Sincerity, Abrams, A.H.;1953)でも真実でなくても、読者が老人発話 " Object " について「真実でない」という解釈を行うように、つまり発話意図の再構成を行うように誘導されていた。これらを実際のデータを対象として同様の現象を求めた(分析 B) 患者の行動を巡り他の介護者の見解が違い言い争いになること、患者本人より介護者のほうが「患者の真実」を代弁する権

利を得ていること、そして患者の行動の解釈も介護者の認識の範囲内で処理されることが分かった。

このようにその介護者の主観が医者と共有され、間主観性が構築され、いつの間にかその間主観性こそ「真実」として独り歩きする様子も観察された。

また分析Cとして、この主観性や間主観性というコンセプトを利用して、引用節内におけるCGの声や言語管理を分析することができる。理論的な軸としてはClark&Gerrig(1990)によると、直接引用はもともとデモンストレーションの一種であり、元話者のどの側面を描写して伝えるか選択できる点について、直接引用とデモンストレーションは類似すると述べられている。Tannen(1986)の直接引用的な“Non-Serious”な“Constructed Speech”の例を述べている。その概念を元に分析Bと関係し、介護者が患者の心理状況や感覚・思考を代弁する「心理動詞」の種類、またそれらは介護者の主観であることを示すモダリティが付属するか、またまったく患者になりきって感情や思考を述べるものかを分析した。その結果、次のように12.1%の「心理動詞」使用時にモダリティは付随しないことが分かった。

さらにモダリティが付属するものとししないものに関しては、両者の違いは直接引用と間接引用の代弁性とも類似していた。つまり患者の通常の発話スタイルと全く異なるスタイルを使用して患者の発話を代弁する場合、むしろ発話者(介護者)の発話があたかもキャラクター変換を経て、(伝えるべき)患者像を演じる・模するといった代弁性が示された。

3) 心理動詞における代理人性と医師のストラテジー

2018年度においては、入手したデータベースによる認知症会話において以下のアウトプットを行った。

a) GURT2018における学会発表(口頭)

“Linguistic deices for constructing the stance-triangle in Japanese dementia discourse”という題目にて“Contrasted Speech”と呼ばれる引用表現に注目し分析を行った結果、患者の感覚について心理動詞といわれる感覚・感情に関わる動詞をモダリティ等の客観化表現を使わずに使用することがあること、“Constructed Speech”については介護者による一定の伝達態度(いらだち、怒り)という一定の主観の下で患者の症状を伝えていることが観察された。

b) GURT2019における学会発表(ポスター)

a)の後続研究として“Polysemy in Japanese Dementia Discourse”として、介護者が患者の症状や感情等を代弁するときに、その発話から発話者である介護者の主観を抜きだし、客観性を確保しようとする医者のストラテジーについて概観した。

その結果、医者が介護者談話の客観性を保証しようとする際には、a) 信ぴょう性を確かめる方法として、詳細化要求・発話状況への疑い・リソースの多様化(他者の意見を聞く)・物理的検査結果の確認・患者自身への問診、b) 介護者による主訴の位置づけとして主訴の危篤性や治療の必要性、頻度、また通常の老化や以前の状況との比較、c) 主訴症状の原因および結果を確認するなどが観察された。

4) アウトリーチ(分野横断国際研究会・社会との対話)

2019年度においては主に、下記に挙げるような論文出版・国際研究会の開催・市民との対話セッションを行い、研究成果の公表および社会との双方向的コミュニケーションに注力した。

a) 論文発表

2020年度4月に“Validation, Invalidation, and Negative Speech Acts in Dementia Care Discourse”と題した論文をFrontier in Communication, Health Communication (Switzerland)より出版した。当論文では看護学概念である「バリデーション(VD)」について、語用論・間主観性やスタンス・テーキングといった指標から分析を行い、認知症コミュニケーションというジャンル特性を明らかにしようとした。

b) 国際研究会

2019年8月に『認知症と言葉』研究会を開催し、メディア研究、情報技術、外国人介護者のためのICT等について日本・デンマーク・イタリア・マレーシア・イギリスとの多分野融合による国際研究会を行った。

c) サイエンスアゴラ2019

「言語×情報学で創る未来の認知ケア」として、言語学フレームによる「結束性」「背景付け」「個人化」といった要素は、「BERT汎用言語モデル」や「身体パブリック」といった追体験技術により可能になるとの提言を受けた。

さらに、認知症対話ロボットに関する倫理問題等について社会心理学分野をモデレーターとした市民との共話を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Amino Kaoru	4. 巻 5
2. 論文標題 Validation, Invalidation, and Negative Speech Acts in Dementia Care Discourse	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Frontiers in Communication	6. 最初と最後の頁 1,17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fcomm.2020.00020	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kaoru Amino	4. 巻 7
2. 論文標題 STANCE-TAKING IN DAZAI OSAMUGYAKKO AND AKUTAGAWA RONEN; RECONSTRUCTING THE “REAL” INTENTION BEHIND THE ELDERLY CHARACTERS’ UTTERANCES	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Journal of Linguistics and Literature (IJLL)	6. 最初と最後の頁 71,99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Kaoru Amino
2. 発表標題 Linguistic deices for constructing the stance-triangle in Japanese dementia discourse
3. 学会等名 GURT 2018: Approaches to Discourse（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 網野薫菊
2. 発表標題 認知症会話における談話分析応用の可能性；ターン・複文節・間主観性の視点から
3. 学会等名 第19回 東アジア日本語・日本文化フォーラム（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kaoru Amino
2. 発表標題 The polysemy in Japanese Dementia Discourse; Representing patient's symptoms as representing care-giver' self-story
3. 学会等名 Linguistics and the Public Good (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kaoru Amino
2. 発表標題 Linguistic devices for constructing the stance-triangle in Japanese dementia discourse: Citation, evaluation and verbs of perception
3. 学会等名 Georgetown University Round Table 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 網野薫菊
2. 発表標題 認知症会話における談話分析応用の可能性：ターン・複文節・間主観性の観点から
3. 学会等名 第19回 東アジア日本語・日本文化FORUM (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 網野薫菊	4. 発行年 2018年
2. 出版社 花書院	5. 総ページ数 124
3. 書名 談話分析の認知症コミュニケーションへの応用	

〔産業財産権〕

〔その他〕

社会活動【研究会の企画・主催】

1) 『認知症と言葉』研究会 (Research Meeting on Institutional and Health talk for Social Applications), 東京, (2019.8)<https://info.ninchisho.net/archives/33504>

2) サイエンスアゴラ2019

【出展1】言語×医療×情報学で変える未来の認知症ケア

<https://www.jst.go.jp/sis/scienceagora/program/booth/8c05/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	豊田 謙二 (Toyota Kenji) (60244802)	熊本学園大学・社会福祉学部・教授 (37402)	2018年度辞退